

〈鬼のぬげがら〉考

—天正狂言本と狂言古画—

田口和夫

〈抜殻〉の古型

狂言〈抜殻〉は中世から現代まで演じ続けられていた人気曲である。ただし、中世の形を見せる天正狂言本の〈鬼のぬげがら〉と、近世以降の諸台本にみえる〈抜殻〉との間には明らかな違いがある。まず天正狂言本の校訂本文を引いて、その違いを確認してみよう。

- 1 殿出て、人を呼び出し、花ごの所へ酒をやる。
- 2 道にて皆のむ。酔ふて、たるまくらにしてねる。
- 3 主、遅きとて迎ひに行く。
- 4 これ見て腹を立て、太郎冠者を鬼につくる。
- 5 目覚めて、水のむとて驚く。
- 6 帰りに嘆く。主出合て様々せれふ。
- 7 何かの事、たひちやうとりさせて、面をはずす。
- 8 抜殻とて見ておどろく。とめ。

和泉・大蔵流の現行演出と大きく相違するのは、1・2・7の段である。まず1・2段について現行を梗概化すると、各流とも同じで、1太郎冠者を使いに出すについて酒を飲ませる。2酔った冠者は道に寝る、という進行になる。ただし、使いに出す理由が各流とも異なる。それは近世初期からすでに異なっており、和泉流天理本では1客があるので肴を求めに行かせる、大蔵流虎明本では1彼の所へ使いにやる、鷺流保教本では1茶の湯の道具を叔父の所へ借りにやる、とするので、三流三様である。この部分がまだ固定化されていなかったためと推察されるのだが、天正狂言本に近いのは虎明本である。彼の所(後には「彼の人の所」という)は男女を明示しないが、愛人を指すと見られ、「花子」に近い。天正狂言本の、1冠者に酒樽を持たせてやり、2道で飲み樽を枕に寝る、という趣向は近世以降には無い。3・4・5・6段と留めの8段は梗概化すればすべて共通である。

7段に問題がある。まず、太郎冠者が追いついていないのである。次に「たひちやうとり」という言葉の解釈である。最初に翻刻付注された表章氏は「この一句未詳。今は身を投げるため飛上って面をはずす」と注される。藝能史研究会のシンポジウムで共同研究の成果を発表された堀口康生氏はこれを「大蛇踊り」であると解された(「藝能史研究」五二号、平12)。それを聞いた松田修氏と私は「怠状取り(詫びさせる)」と解すべきだと堀口氏に伝えた。爾来この二説並立のまま現在に至っている。今あらためてこれを考えると、「怠状取り」説は表現としては自然だが、狂言のこの場面の解としては適切ではない。もともと「何かの事」を「させて」という文脈に注記的に挟み込まれた言葉であって、そのまま「面を外す」という行為につながる部分なのである。言葉だけの「詫びる」では弱い。それに比べて「大蛇踊り」には所作が想定でき、狂言の終局にふさわしい。また鬼面(おそらく武悪)を抜殻と認識するのは普通ではない。大蛇からの連想が働いて「抜殻」という言葉が出たと考える方が自然である。以上の様に考えて「怠状取り」説を撤回することにした。それでは大蛇踊りの所作はどのようなものであったのか。現行では入水しようとして飛び上がった時に面を外す。しかし近世初期には、水辺へ行って入水するという場面は狂言記正編以外は無かった。追いつかれた太郎冠者は

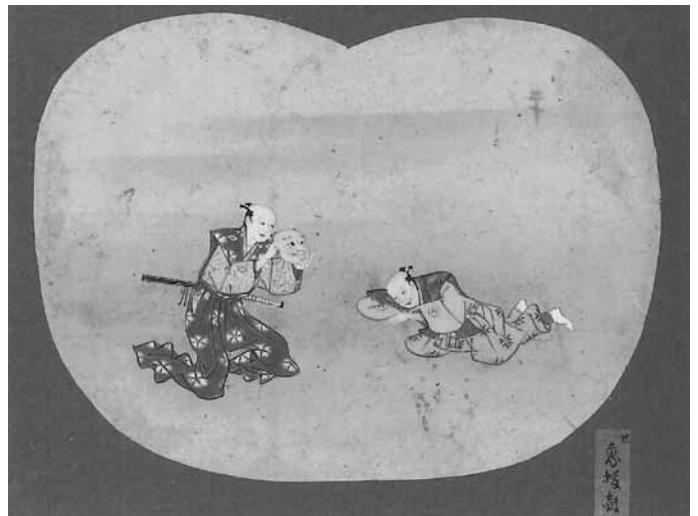
その場で面を外すのである。虎明本は「ねつ、おきつして、みもだへして、めんぬぎ」、天理本は「ないてころびまわつて、面をはづす」であつて、両流共通の演出であつた。「寝つ起きつ身悶え・転び回る」、これが大蛇の所作の残存だったと考えたい。やや時代が遅れる享保保教本では、「身を揺り、悶ゆる」後で「淵川へも身を投て死んだが増じや」と「飛狂い転び」とある。少し現行演出に近くなつていると言えようか。

蛇足だが、抜殻でまず連想されるのは「蟬蛻(せんぜい)せみのぬけがら」であろう。源氏物語の「空蟬」や聖徳太子説話の片岡山の段に見える達磨大師(夢窓)夢中間答集(にも)のように、着衣ばかり残して体が消える「蟬蛻」の姿である。大蛇の方では、稲田秀雄氏が天理本の注で「蛇体に変身した者が抜殻を残して再び人間に戻る『地藏堂草紙』や『諏訪の本地』(甲賀三郎譚)のような説話をふまえるか」とされる。この「地藏堂草紙」(『御伽草紙絵巻』角川書店)は面白い。竜宮から帰つた僧が地藏堂で寝ていると大蛇になつていた。僧は地藏に願うとその夜、「この大蛇のせなかはたとわかれて、その背より此僧はひ出て、ぬけがらをみるに、まことにおそろしき事たとへていはんかたなし。ぬけがらはすなはち死てふしたり」とある。抜殻だけではしつかりした形は無いだろうが、この物語の末に注記があり、「件の蛇のかしらいまにあり、ま

さしく見たるよし・」とある。蛇の抜殻として頭が残る、そのような説話が背景として考えられる。

古画に見る古演出

掲出した画は江島弘志氏蔵「古狂言後素帖」夏20の「おにのぬけがら」である。他古画集には同類の図は無い。『狂言集成』の(簀屑)の挿絵に用いられているが、(簀屑)は次郎冠者が面を着けに行くので、誤りである。夏19にも(抜殻)の画があるが、鬼姿の太郎冠者が主に追い出されている場面であつて、国文研狂言絵や藤岡道子氏の考証による徳川美術館『山脇流』の(抜殻)も同図であり、現行舞台でも同じ場面があり問題が無い。20の方には二つ問題がある。一つは曲名で、「鬼の抜殻」というのは天正狂言本にしか見えないことである。もう一つは、寝ている太郎冠者の姿である。「後素帖」において寝ている姿は秋21(菴山伏)にあるが、安座し、左腕で顎を支えている形で、夏16(くらま参)で主が参籠している形に近い。20の太郎冠者は両足を後ろに伸ばしているもので、うつぶせ寝のようだが、上半身が不安定に見える。これに類する形は現行(寝音曲)で、太郎冠者が主の膝を枕にして寝る姿がある。とすると、これは何かに、例えば酒樽(葛桶)に寄りかかつて寝る姿であつて、その樽が描かれていないと言えるのではないか。この考えが認められれば、この絵柄



は近世以降の諸台本には存在しない場面となる。唯一、天正狂言本の2段に「樽枕にして寝る」と記される場面が、ここに想定できる。問題とした二つのことは、この古画が天正狂言本(鬼のぬけがら)の系譜を引く舞台を書き留めていたと証することになる。近世初期歌舞伎等へ流入した中世の演出が、狂言の舞台として書留められた一証と考えておく。

(コロナ禍のなかで 文教大学名誉教授)